

日時：令和7年11月21日（金）
10時～12時
場所：京都市役所分庁舎4階 第4会議室

1 開 会

2 議 題

- (1) 次期京都市地域コミュニティと市民参加に関するビジョン（以下、「次期ビジョン」という）の策定について（資料1）
- (2) 次期ビジョンのパブリック・コメントの実施について（資料2）



京都市市民参加推進フォーラム委員名簿（令和7年10月1日時点）

（敬称略／50音順）

氏名 （◎：座長、○：副座）	肩書等	委嘱期間
荒木 勇輝	特定非営利活動法人寺子屋プロジェクト（Tera school）代表	R2.4.1～R8.3.31
◎ 乾 明紀	京都橘大学経済学部 教授	H31.4.1～R9.3.31
今里 佳奈子	龍谷大学政策学部 教授	R7.6.1～R9.5.31
岡田 祐樹	京都青年会議所 副理事長	R7.1.1～R8.12.31
○ 白水 育世	一般社団法人マチノミカタ 理事	R4.4.1～R8.3.31
竹田 明子	公益財団法人京都市ユースサービス協会ケア事業担当統括	R6.8.1～R8.7.31
千葉 晃央	京都光華女子大学看護福祉リハビリテーション学部 准教授	R6.8.1～R8.7.31
中嶋 もも花	市民公募委員	R7.4.1～R9.3.31
○ 並木 州太郎	龍谷大学政策学部 講師	R3.4.1～R9.3.31
西澤 純	市民公募委員	R6.4.1～R8.3.31
平井 誠一	株式会社西利 代表取締役社長	R7.4.1～R9.3.31
平野 哲広	京都信用金庫QUESTION 館長	R6.8.1～R8.7.31
松井 順子	藤城学区自治連合会 副会長	R7.6.1～R9.5.31
水本 園乃	市民公募委員	R7.4.1～R9.3.31
森田 明男	市民公募委員	R6.4.1～R8.3.31

本日の会議では、以下のことを目指します。

- ・ 次期ビジョンのパブリック・コメント（案）の確認

⇒ 本日確認した内容を踏まえて、次期ビジョンを修正し、12月下旬から、パブリック・コメントを実施（予定）。

【報告】 所要時間：約 30分

- ・ 次期ビジョンのパブリック・コメント（案）の説明及び確認

【参考資料】

- ・ 第3回会議の意見（グループ対話）
- ・ 市民意見を聴く場の意見まとめ

グループ対話 市民意見を聴く場を踏まえ、次期ビジョンの「目指す姿」と「施策」に盛り込むべき内容は？

<Aグループ> 並木副座長、岡田委員、中嶋委員、平野委員、松井委員、水本委員

- ・ 市民意見を聴く場で気になったのは、「みんなが参加して創るまち」「不完全を共に埋める」「自分の力を発揮できるまち」「当事者意識」「楽しみながら参加できる」「ぬか床のように交ざり合うまち」など。
- ・ 「地続き」「日常からごちゃ混ぜになる」「長期的に何かあった時に協力しあえる」も気になった。地域にいる困っている人との繋がりをいかに感じられるか。
- ・ 色々な活動が生まれることで「常識のアップデート」が起きるとするのは、目指す姿であると思う。図書館は静かに使う場所という常識が変わるなど。
- ・ 前回のフォーラムと、市民意見を聴く場で共通の意見が2つあった。1つ目は「繋がり」。正解がない時代こそしなやかな繋がりが重要で、5分・10分でも関わると良いという意見は、フォーラムでも挙がっていた。2つ目は「主体性」。サービスの受け手と供給者ではなく、お互いの立場を理解しあって、一緒に解決していこうという共創の姿勢が重要。
- ・ 市民意見を聴く場の参加者は、市民活動をしている人たち。熱い思いがあるが、活動に人が集まらなかったりする。自分のような地域活動をしている人が、彼らと地域活動をつなげられるとよい。
- ・ 人のためにやったことが、自分の喜びや幸せに繋がると、より多くの人に関わるようになる。また「短時間で関わられる仕組み」や「気付けば参加している仕掛け」もキーワードだと思った。
- ・ 午前のフォーラムでの意見だが、「ボランティアの限界」は印象に残っている。
- ・ 先日、子どもたちがお仕事体験するイベントを実施したが、無料だと人が集まるが、有料だと集客が難しくなる。みんなが利用できる公共サービスをもっと発信して、みんなで相談しあえることが大事にではないか。
- ・ まちづくりは、新しく始めた活動や人に注目が集まりがちで、継続的な活動はあまり注目されない。続けるための仕組みを、もっと考えられるとよい。
- ・ まちづくり活動には地味な活動もたくさんあるが、活動をしている人は、まちづくりをしている自覚がないのでは。そのような人にも自覚してもらい、サポートすることが必要ではないか。

- ・ 子どもの登下校を見守る「83運動」というのがある。自分の地域では「見守り隊」という活動をやっているが、登下校の時間に立てる人がなかなかいない。
- ・ 会社勤めの人が、通勤ついでに会社の近くで見守り活動をやっても良い。カフェをやっている振りをしながら、地域の支援活動に繋げようとしている事例の話聞いた。カフェをやっている「振り」というのがポイント。ゲーム感覚や遊び感覚で、気付くと参加している状態を作ること、無理なく継続することができる。
- ・ 行政職員が背負い込んで病んでしまうのは大きな課題だと思う。
- ・ 力を発揮したい人をいかに活かすか。お祭り等地域イベントの手伝いを呼びかけると、東京から参加する人もいる。そういう人をつなぐ仕組みがあると良い。
- ・ 1社では難しくても、複数社で地域活動に取り組む仕組みがあると良い。
- ・ 「不完全さ」の良さを施策に入れられないか。不完全な取り組みでも始めてもいいという後押しなど。
- ・ 「不完全さ」は大事。完璧でないと批判される、早くやらないという圧がある。
- ・ 不完全だから、人に助けを求めたり、人の意見を取り入れられる。政策になると、予算通りでないといけませんが、不完全なことで、関わる余白が生まれる。
- ・ 余白があることで、アップデートすることができる。
- ・ 「つながる」「支え合う」「創り合う」は、三者関係で捉えると良い。
- ・ 「大学のまち京都」を活かしていないのがもったいない。企業と学生、行政と学生の繋がりがもっとあると良い。学びの機会として、企業と学生が共創するなど、もっと大学で学んだことを活かす機会があると良い。
- ・ 官民一体をもっと推進できないか。新しくオープンした「Re.Nova北山」は良い事例である。「自分たちのまちは自分たちでつくる」をビジョンに入れたい。
- ・ 地域にボランティアに来た大学生が、楽しかったので来年も来たいと言っていた。「楽しさ」も大事である。
- ・ 主体的に活動している学生と接点を持ちたい企業との繋ぎ役がない。
- ・ 学生が地域に出る方が、教育効率が高いと考えている大学は、どんどん学生を出していく。そのような発想がない大学にとっては、手間に感じるのだと思う。間に立って価値を翻訳できる人が必要。
- ・ デザイン系の学生に全体のイメージ図を作成してもらってデザインコンペを開催してはどうか。さらには、すべての審議会に展開していけるといいだろう。

グループ対話 市民意見を聴く場を踏まえ、次期ビジョンの「目指す姿」と「施策」に盛り込むべき内容は？

<Bグループ> 白水副座長、竹田委員、千葉委員、西澤委員、平井委員

- ・ 正解のない時代だからこそ「不完全さを共に埋めていく」「余白を共に埋めていく」という意見があった。目指す姿や全体イメージに取り入れるといいのでは。
- ・ 「不満が課題や挑戦に変わる瞬間」も印象に残っている。場を作っても、愚痴を言うだけで終わってしまうことも多いが、いかに共通の挑戦にしていくか。
- ・ 変化が起こると新たな悩みが生まれるという意見があった。みんなでやれて良かったで終わるのは危険。PDCAサイクルは、昔はPDSAだった。SはスタディのSで、今は検証だけになっているがスタディが大事。
- ・ 「継続性」というキーワードも大事ではないか。
- ・ 市長が「区役所が皆さんの気付きを吸い上げる役割を担う」と言っていたが、区役所で待っているのではなく、吸い上げるために自ら出向くのが良い。
- ・ ビジョンには書きにくいと思うが「お金」の話が出てこない。動けなくても、お金を出す人がいてもいい。NPO法人に寄付をするなど。
- ・ 100人委員会の1年目は、意見を出しあつたすっきり感があつたが、だんだん意見を出しても社会が変わらないという不満になり、愚痴になり、市政への批判になるという状況に陥った。そこで、意見を事業化するための予算を組み、いくつかの事業が生まれた。お金も含めて、形にするための施策が必要である。
- ・ 目指す姿の「つながる」「支え合う」「創り合う」を、二者関係だけではなく三者関係で捉え、その中にお金のお話を入れるといいのでは。
- ・ 市民意見を聴く場に参加した人たちが活躍できる場をつくることが重要。また、彼らは自分たちの活動を知ってもらいたいという気持ち強い。
- ・ 「まちづくりお宝バンク」は、活動紹介や協力の要請もできる仕組みであるが、まだ知れ渡っていない。
- ・ 施策9に情報発信のノウハウ蓄積を加えてもよいのでは。ツールがあっても、ノウハウがなければ、継続できない。
- ・ 全体を通して気になることは、活動が増えてくると利害関係がぶつかるが、そこで分断ではなく、いかにお互いの活動を知り、相互フィードバックができるか。その要素を施策に入れたい。
- ・ 「市政参加」や「まちづくり活動」の定義を明確にして、それぞれどのような活動でどのような機会があるのか、わかるとよい。

- ・ 市民意見を聴く場で「市民参加のハードルを下げる」重要性が挙げた。施策1「活動の魅せる化」によって、反対にハードルを上げる可能性はないか。魅せる化がいけないのではなく、課題を1つ解決すると、また新しい課題が生まれる。次期ビジョンのイメージとして「くねくね」とした表現ができないか。
- ・ 自分の周りが豊かになっていくことを表現できないか。例えば、しずくが広がって虹色になる、波紋と波紋がぶつかって、新しい波紋が生まれるなど。
- ・ 「創り合う」の後にまた「つながる」が来るような「循環」を表現できないか。
- ・ 「つながる」「支え合う」「創り合う」の間に「衝突」を表現してはどうか。良質な衝突から調和が生まれ、イノベーションが生まれる。利害関係が異なる人同士が衝突すると、新しい調和的なアイデアが生まれてくる。
- ・ 過去に、似たような活動のまちづくり団体を集めて繋げようとしたが、想いが少しずつ異なるので上手く合流できなかった。活動が遠い方が、融合しやすい。
- ・ 「あそこは違う」というのも一つの強みだが、繋がりを選択肢が広がったと捉え、自分たちだけでは全てできない、「不完全」だという前提を持てると良い。
- ・ 社会問題を解決するようなソーシャルビジネスが増えることも重要である。前市長は、行政と市民と事業者の連携が重要と言っていた。
- ・ 京都には外国人がたくさんいる。外国人のことをビジョンに入れられないか。
- ・ 市民意見を聴く場でも、「地続き」「かき混ぜる」といった意見が挙がっていた。
- ・ 最初のステップは「つながる」だと思うので、そこに施策4「多様な違いを受け止める」の要素が入るといいのではないか。
- ・ 社会課題に取り組む上で、事業者のビジネスとしての協力が必要なことがあり、そうやって新事業が生まれることもある。例えば、ICTのプログラム開発はIT会社が行い、京都で成功したら、他の地域に売りにいくと思う。
- ・ ボランティアベースの活動が限界を迎えているところもある。持続させるためにはお金を生み出すことが必要。
- ・ 市民意見を聴く場で行政が抱え込みすぎているという話があった。行政がもっと市民を信頼し、定期的に双方型でのコミュニケーションを重ね、より柔軟で建設的な協力（協働）関係をつくっていきけるとよい。
- ・ 市政協力委員の協力業務を拡大して、週1回市役所で働いてもらってはどうか。行政に意見するだけでなく、一緒に仕事をする人を増やしても良い。

問い① (自身の経験も踏まえて) 人々が市政に参加し、まちづくり活動を行う意義は何だろうか。

- ・ 深草が大好きで、深草をいいまちにしていきたい。みんなが元気でつながって、居場所と出番があるまちにしたいと思って、プロジェクトを立ち上げた。歴史や文化などを通じて深草を知ってもらい、深草のファンを増やしていきたいと考えている。
- ・ 個人で映画の配給会社をしている。映画の上映会をして、色々な人に関わってもらっている。今日の参加者はまちづくりに興味のある人が多いと思うが、映画の上映会に関わる人はまちづくりに興味がないけれど、面白いことをしたいと参加してくれる。このような入口も意味があるのではないか。上映会では、このような場に出られない地域のお店の人に飲食ブースを出してもらったりしているが、そこで行政との繋がりが生まれたりする。
- ・ 醍醐寺近くの古民家で、中高生を対象にしたフリースペース活動をやっている。もともと別の団体で子供の貧困対策のボランティア活動をしていた。そこで、自分の当たり前と異なる生活をしている子どもに対して、支援の対象として考えるのではなく、同じ地続きの社会を生きているという感覚を持つことが重要ではないかと感じた。それが自分の活動に取り組む動機づけになっている。
- ・ モザイクアートを通じてまちを楽しくしたいと思って活動している。例えば、上賀茂神社で毎年製作をしたり、小学校でワークショップをしたりしている。美術館以外でもみんなが参加できるアート活動を目指している。
- ・ 2年前からコミュニティナースの活動をしている。具体的には、下京のいきいき市民活動センターに週1回移動販売車が来るのにあわせて、地域の人のお話を聞いている。そこから何か支援に繋がればと考えている。困っている人とセンターの人など、みんなが繋がって解決していくことに、活動の意義を感じている。
- ・ 学生団体を立ち上げて地域課題に取り組んだりしている。具体的には、竹田地区で月1回駄菓子屋をひらいて、子どもたちの居場所づくりをやっている。その中で、昨日晩ご飯を食べてないという子どももいたりする。学生としてできることと、できないことがあるが、行政やこの場に参加している皆さんとの繋がりによって、あったらいいのが実現できるのではないか。その積み重ねで地域は良くなっていくのではないか。
- ・ イベントを実施する中で思うのは「不完全さの良さ」。自分にはできないことがあるが、一人で解決しようとするのではなく、誰かを頼る。今の自分の役割は繋ぎ役だと思うが、何のためにやるか、誰とやるか、どこでやるかをみんなと共有して、不完全さを共に埋めていくことが重要ではないか。
- ・ 深草しゃべり場を毎月やっているのだが、小さな集まりでも継続していることに意義があるのではないか。この地域で活動してみたいが、何からやればいいのかわからないという人が参加したりする。多様な方が参加することで、活動分野を超えた学び合いが生まれている。このような繋がりがあることによって、何かあった時には協力しあえると思う。
- ・ 先ほど「新しい公共」と市長が言っていたが、これまで一つの正解が与えられたところから、地域や社会のあり方が変化している。正解がないからこそ、反対に色々な可能性があるのではないか。大変なところもあるが、一人ひとりが補い合うことによって、新しいイノベーションが生まれるのではないか。

問い② より多くの人が市政やまちづくり活動に参加するようになったまち（自身の周囲や京都全体）は、現在どう変わっているだろうか。

- デベロッパーと一緒に、顔の見える関係作りを地域で行っている。お寺を拠点にしたまちづくりを山科でやっているが、より多くの人が市政やまちづくり活動に参加するようになると、「住民同士の共助によるレジリエンスの向上」が起こると思う。地域の中で、不完全さを共に埋めたり、余白を見つけたりしていくことで、自分の未来を創っていける感覚を持てるようになると思う。地域に知り合いが増えて、人への理解が深まると、他の人のために何かできないか、小さくても考えるようになるのではないか。共助が広がるまちになってほしい。
- ハッピーをデザインするという理念で、経営者7人で会社を立ち上げた。今年の3月に、子ども食堂と駄菓子屋と、夕ご飯のおかずのテイクアウトが一緒になった飲食店を作った。この問いに事前回答した時には「みんなが伸び伸び・生き生きとしている」と書いた。楽しいことをやっている、一人ひとりが持つ力が解放されて、それがまちを良くしていくエネルギーになるのではないか。隣の人と笑い合う体験や、繋がりが広がっていくといいと思う。
- まちづくりの仕事をしている。より多くの人が市政やまちづくり活動に参加するようになると、色々なものが変わっていくと思う。常識も変わっていくだろう。現在、東山区の図書館で「騒げる図書館プロジェクト」をやっている。図書館では騒いではいけないと言われるが、騒げる時間があってもいいのではないかと提案して、実証実験をやっている。最初は、これまでの利用者との間にハレーションもあったが、継続することで理解が広がり、図書館の新しい利用者も増えた。まちづくり活動を通じて新しい常識が生まれるのも醍醐味ではないか。
- まちづくり推進委員会で活動しているが、まちづくりのランドデザインに悩んでいる。少子高齢化が進む中で、賑わい作りが課題だと考えている。地元の人間からすると、老若男女、多様な世代がいる賑わいを作りたい。一方で、京都市全体で見ると、賑わいすぎて困っているエリアもある。
- より多くの人が市政やまちづくり活動に参加するようになると、市民同士の活発な交流が生まれると思う。そこで生まれた色々なアイデアを行政が施策として取り入れることで、地域の活性化や、みんなでまちを創っていくことにつながると思う。仕事で放置竹林問題に関わっており、小学校の授業で放置竹林のことを学んだり、解決アイデアを考えたりという活動に伴走している。地域課題を学ぶことによって、自分ごと化され、主体的な行動が生まれていくと思うが、それがまちづくりの根幹なのではないか。
- 子どもの居場所作りを行なっているが、「虹」という歌の歌詞にあるように、来ると気分が晴れる場所にしたいと思っている。自分も「虹」のような存在になりたい。地域で毎朝「おはよう」と挨拶活動をしているおっちゃんがいるが、自分で実行するのはなかなか難しい。地域活動をしようと思ってするのはなく、自分がいいと思ったことをシュツとできるようなまちになると良い。
- 東山区で移住者を呼び込むプロジェクトをしている。東山区の観光地ではない場所の写真を撮ってSNS投稿したりしている。自分はまちづくりに参加したことで、今まで不満に思っていたことが不満でなくなったり、自分も解決に向けて参加したいと思ったりするようになった。参加することによって、不満ではなく、一緒にやっついこうと思えるのではないか。
- より多くの人が市政やまちづくり活動に参加するというのは、京都を創る当事者が増えるということではないか。余白があって、不完全さを共に埋めていくようになると、サービスの受け手と提供者という関係性が崩れるのではないか。自分たちのまちを創っていくという当事者意識が芽生えるのではないか。
- みんなが当事者になると、京都はより魅力的なまちになり、色々な人がもっと関わりたい、力を発揮したいと思うまちになるのではないか。その上で、楽しさが大事だと思う。自分の意見を言いにくいと、行政任せのまちになってしまうだろう。新しいものがどんどん生まれるまちは多様性があり、しなやかでレジリエンスが高いと思う。魅力的なまちは、みんなが関わりたい、力を発揮したいまちではないか。

問い③ より多くの人に市政やまちづくり活動に関わってもらうために、自分自身ができることは何だろうか。

- ・ コミュニティナースとして、自分の得意なことを活かして活動し、周りの人を笑顔にする人を増やしていきたい。
- ・ 市政参加やまちづくり活動にハードルを感じる人や、自分には何もできないと思う人もいると思う。そのような人たちの話を聞きながら、一緒にやろうよと声をかけて、ハードルを下げていきたい。
- ・ 60年前から地域の方々のニーズを拾って活動しており、現在は社会福祉法人として児童館や重度知的障がいの方の施設の運営などを行なっている。ちょうど施設の建て替え時期なのだが、子どもは子ども、障がいのある人は障がいのある人など、地域の中で分断するのではなく、日常からごちゃ混ぜになる場所をつくれなかと考えている。
- ・ 伏見区の施策である「伏見港パートナー制度」を通じて、地域の人とつながることができた。行政に感謝したい。現在、お寺でお祭りを開いており、地域に点在している素晴らしいお店を繋げたり、大阪や東京など地域外から人を呼んでくることをやっている。このような取組を今後も続けていきたい。
- ・ 「自分ごと」というキーワードが出てきたが、とても大事だと思う。自分も東京に住んでいた時は地域に興味がなかった。気付けばまちづくりに参加しているような仕掛けをいかに作っていくか。あえて余白を残して、そこに参加してもらう人をいかに増やしていくか。

- ・ 東山で焼き損じの陶器を集めて、環境活動をやっている。最初は大きな箱に無造作に入れていたのだが、分野別に綺麗に並べると、みんなもらっていきやすい。焼き損じの陶器を使った茶道教室もやっているが、茶話会ではみんなが本音で話してくれる。本音で話すと、応援してくれる人に出会える。フリーランスでファシリテーターのような活動もできないかと考えている。
- ・ 竜馬通り商店街で蕎麦屋をやっている。そこで、企業の協力を得て、子ども食堂をやっている。兄弟で来る子どもが多いのだが、子どもたちを通して、日々の楽しみを知ることができている。子育ては、京都の未来につながる。和船を伏見港に浮かべて、子育て世代に乗ってもらいたいと考えている。
- ・ 北区の文化度を上げていきたいと考えて様々なまちづくり活動をしている。人口が減少しており、一人が複数の役割をしないといけなくなっているので、できるだけハードルを下げて、5分や10分でも関わられるような場を作りたい。
- ・ まちの魅力というのは、行政が完璧なものを用意して市民が消費者のようになるのではなく、正解がないからこそ、自分たちで考えて不完全さを埋めていけるところにあるのではないかと。不完全さは機会と思えるまちを作っていきたいということで、冒頭の市長の話とも繋がると感じた。

◆ 実施時期

令和7年12月25日（木）～令和8年2月2日（月）（予定）

◆ 意見収集方法

書面による提出（直接提出、郵送、F A X、メール、W E B（京都市情報館）） + 対話型

◆ 広報

- ・ 市役所、区役所・支所、京都市関連施設等での配架
- ・ W E B（京都市情報館、みんなでつくる京都HP等）、各種S N S など

◆ パブリック・コメントの周知等の依頼

委員の皆さまが所属されている団体内や大学の授業・ゼミ、団体等の会合、イベント等でのパブコメの周知、対話型パブコメの実施（可能な場合は、意見の回収）をお願いします。
対話型パブコメを実施する場合は、事務局がお伺いして説明することも可能です。

<参考>

第3期市民参加推進計画におけるパブコメの意見総数 … 473件